
キミ想イ。

櫻井 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミ想イ。

【Nコード】

N7306L

【作者名】

櫻井 遼

【あらすじ】

大好きだった彼　優哉を、
トラックの事故で亡くした美希。

塞ぎ込む美希をからかうように流れる、噂。

真面目でやさしいけれど、内気だった美希は、
優哉の死によって変わってゆき・・・？

プロローグ。

1か月前。

「キキイ ! !」

「ボンッ」

甲高いブレーキの音。

何かにぶつかられたような鈍い音。

それは、あまりに突然の出来事だった。

目の前で起きたことが信じられなかった。

受け入れられなかった。

登校中の悲惨な事故。

原因はトラックの信号無視。

たった今、となりで自転車をこいでいた君が、
目の前に倒れていて・・・

どこかで、

「事故だ! !」

という声がする。

「救急車を呼べ! !」

という声がする。

そのなかで私は
呆然と立ち尽くすばかりだった

。

回想

二人で原っぱに座っている。

ピクニックに来たんだ。

ランチは私の手作りサンドイッチ。

優哉は、おいしそうに食べてくれる。

あれ？？

おかしいな・・・

優哉がだんだん薄くなっていく・・・

「ハッ！！」

ガバッと起き上がって時計を見ると

午前7時。

学校には間に合いそうだ。

急いで支度をして、家を出る。

私は^{のほらみき}埜原美希。

17歳、高2、テニス部所属。

彼氏は・・・

夢の中でなら会える。

わかりやすく言えば、

この世の人ではなくなってしまった。

1か月前・・・

交通事故で。

あつけない死だった。

そして何もできず呆然と立ち尽くす自分が

情けなかった。

優哉がいなくなってから、

学校はつまらないものになった。

もちろん、友達だっているし、

1人じゃない。

だけど、優哉が私の中でどれだけ大きな存在だったか、
思い知らされた。

たったの2年間しか一緒にいなかった、

たった1人の存在・・・

それでも、私の一部だった。

中学3年の時告白されて、

付き合い始めた。

付き合ったことはこれまでに何回があったけど、

どれもすぐに終わってしまった。

だから、今回も終わるだろう・・・

そう思っていたのに・・・

優哉はとても優しくて・・・

私のことを考えてくれて・・・

いつでも笑顔で・・・

きつと、これまでに私が出会った人の中で、最高だったよ。

優哉のことを思い出すと、

思い出が止まらない。

いろいろあつた2年間だったから、

きっと一生で一番大事な宝物。

あの日、優哉にあつたから、

楽しくて、

面白くて、

ドキドキして、

せつなくて、

悲しくて、

苦しくて、

でも最高の恋を経験できた。

優哉が優しすぎて、

その優しさが見えなくて、

別れそうになったこともあつた。

他の人に惹かれそうになったこともあった。

ほんとうにたくさんの思い出を残して、

私のことも残して、

この世を去ってしまった優哉。

わたしは今も、

これからもずっと、

空にいる君を想い続けます・・・。

出会い

2年前の6月。

中学3年だったあたしは、気晴らしに、

プールに行った。

「一人でいるほうが落ち着く・・・」

そう思いながら、プールに足をつけてみる。

ひゃっ！冷たい・・・

寒さの残る6月。

プールにはった真新しい水は、まだちょっぴり冷たかった。

そのとき。

プールに1つの影を見つけた。

影のあるほうへ行ってみる。

・・・？

そこには、とてもかっこいい男子が1人、寝ていた。

それが、優哉だった。

寝顔に見とれていた私は、ふと、思いついて、

優哉の顔をツンツンしてみた。

すると・・・

優哉は、起き上った。

「あの・・・今年初めて同じクラスになったよね??」

「ああ・・・えーっと・・・あ、埜原!! 埜原美希だよね?」

「わあ! 覚えててくれたんだ! 朝倉裕也、だよね?」

「うん。」

これが優哉と初めてしゃべったとき。

あの日、あの場所で、優哉と私はいろんなことをしゃべった。

優哉はサッカー部のことや、クラスのこと。

私はテニス部のことや、女子の愚痴。

私は優哉の話を一言ももらさず聞いていたし、

優哉も私の話を真剣に聞いてくれて、ときにはアドバイスもしてくれた。

そんな優哉と、初めてしゃべったあの日、

きつと私は惹かれたんだと思う。

しばらくして

優哉に告白された　　かわいいオルゴールと一緒に。

私はすごくうれしくて・・・

すぐOKして、私たちは付き合いだした。

ふたりでご飯食べたり、

遊園地行ったり、映画観たり・・・

私は、この幸せがずっと続くと思っていた。

別れ

「俺達、別れよ。」

そう言われたのは、付き合って3か月、

8月の暑い日のことだった。

「・・・どうして・・・?？」

「お前、津川のこと好きなんじゃないのか？」

「・・・なんで・・・」

「俺は、お前のことより紗江のことを好きになっただ」

え・・・なにそれ。

「そんなの・・・ひどいよ。」

「運命だ、仕方ないだろ」

「待ってよ・・・待って!!」

どうしてこうなっちゃうの??

たしかに津川はいいやつだよ・・・

だけど、美希が本当に好きなのは、

大好きなのは、

優哉だけだよ・・・

いくら心の中で叫んでも、優哉は戻ってきてくれない。

わかってたけど、声は出なかった。

あたしだけが一方的に好きだったの??

優哉は、美希だけじゃなくて、

紗江のことも見ていたの??

そう思うと、とても悲しくなった。

それからは、教室で目があっても、

朝会つても、

しゃべらなくなった。

優哉は、あたしに笑いかけてくれなくなった。

美希は優哉としゃべりたいよ・・・

前みたいに戻りたいよ・・・

いくら願っても、

優哉は笑いかけてくれない。

話しかけてくれない。

噂

「あいつ、優哉を振って直人と付き合ってるんだろ??」

「うそ、最悪ー」

「あの優哉を振るなんていい度胸だよな」

廊下を歩くとみんなの視線が痛い。

何、それ??

直人となんか、付き合ってないよ。

あたしが好きなのは、優哉だけだもん・・・

なんでそんなうわさが流れているのか全く分からない。

気がつけば、紗江がこっちをみて笑っていた。

・・・見下したような笑い。

所詮あんななんてこれくらいのもんよ

紗江の不気味な笑みがそう語っている気がした。

ねえ、紗江?

どうしてそんな笑みを浮かべるの??

紗江は何をしたの??

私から優哉をとらないでよ。

優哉が冷たくなったと思ったら紗江まで

あたしは優哉と話すことにした。

納得がいかない。

どうしてこんなことになってしまったのか・・・

優哉のいるところまでずかずかと歩いていく。

「ねえっ優哉!!」

「おっ、優哉の元カノ登場じゃん!!」

「うるせーんだよ、お前ら!なんだよ美希、話って」

「ちょっと来てくれない?」

そういつてあたしは優哉の先に立って、どんどん歩いていく。

「どこまで行く気だよ」

「・・・」

中庭の桜の木の所まで来て、あたしは足をとめた。

「ねえ、優哉。」

どうして、あたしと別れたの？」

「・・・」

「あたし、優哉と別れてから変な噂ばっか流されて、すごくつらいんだよ。」

あたしが好きなのは優哉だけなのに・・・
直人のことなんか好きじゃないのに！！」

「・・・」

「優哉だつて、ほんとうに紗江のこと好きなの??」

紗江、あたしのこと見下すみたいに笑って見てきた・・・
何か、裏があるんじゃないの??」

「・・・ごめんな、美希。」

おれ・・・ほんとは・・・

紗江・・・のこと・・・

・・・っ好きじゃない！」

「なら・・・どうして」

「紗江に言われたんだ。」

『美希と付き合うのやめれば??』

あの仔、優哉のこと好きじゃないみたいよ。

直人と付き合ってるって噂だし。

二股されてるのなんて、ヤでしょ?？」って

「どうして・・・そんなこと・・・」

「おれ、どうかしてた。

美希のこと信じるべきだったのに・・・

ほんとにごめんな、美希・・・」

「・・・うん、いいよ・・・優哉は悪くないもんね。」

「・・・なあ

おれたちまた付き合えるかなあ・・・??」

「・・・うんっ!」

「じゃあ・・・よろしく!」

・・・あの時

優哉に事情を聴きに行く勇氣なんてなければ

こんなにつらい思いはしなかったのに・・・

再び付き合うことになったあたしたちは

前以上に仲良くなって・・・

喧嘩もして・・・

デートもたくさんして・・・

学校でも知られる仲良しカップルになった。

噂もいつの間になくなって・・・

あたしは幸せの絶頂期だったのかもしれない。

未来はだれにも予測できないのだから・・・

この先何があるのか分からないのだから・・・

現実

「美希は、真面目で、やさしい奴だな。」

微笑みながら優哉が言ってくれた言葉。

今でも、あの言葉を思い出すと、涙が頬を伝う。

優哉だって・・・やさしいじゃん。

あたし、あのとき思ったよ。

優哉は・・・優哉って名前だから、やさしい子に育ったんだな、って・・・

今のあたしを優哉が見たら、なんて言うのだろう。

あの頃は、まっすぐの黒髪。スカートの丈だって、校則通りひざ下。

今は・・・

高校に入って、あたしは変わったと思う。

うつん、優哉を亡くしてから・・・

あたしは変わってしまった。

茶髪にパーマ、スカートは腿のギリギリのところまで。

テストの成績も、通知表もガタ落ち。

ここまで変わってしまったあたしを、

もし優哉が見たら・・・

なんて言っただろう???

優哉は空の上で

どう思っている?

変わってしまったあたしのこと・・・

どう思っている?

キーンコーンカーンコーン

授業終了のチャイムが鳴る。

あたしは、瑠花と一緒に購買へ行く。

日常茶飯事。

ふと・・・

ある人だかりに目がとまった。

「ねえ、瑠花！ちよつとあそこ行ってみよ。」

「えつ、ちよつと美希・・・」

有無を言わない瑠花を無理やり引っ張って、

そこへ行ってみた。

そこは・・・

「誰、あれ??」

知らない男子。でもすごくかっこいい。

「美希、知らないの!？」

「ちょー有名じゃん!!」

「うちの一個上の学年の、柏木拓也先輩。」

「へえーあたしそーゆーの、興味ないからさ。」

言いながら、柏木先輩とやらを観察。

へえ・・・ちよつと優哉に似てるんだ。

優しそうな眼とか、通った鼻筋とか・・・

あつ、いま目が合った！

ドキンッ

胸が高鳴った。

（えっ・・・？）

一瞬自分を疑ったけど・・・

これは優哉とあったあの日の胸の音。

あたしは優哉を失って、二度と恋はしないと誓った。

もし同じ目に遭っても、自分がつらいだけだから・・・

でもあたしは、この瞬間から、

先輩を好きになってしまった。

そして不運なことに（両想いじゃなければ諦め切れたのに）

先輩に、数日後に告白されてしまった。

帰ろうと思ったら下駄箱に一枚の紙切れが入ってた。

放課後、中庭の木の下で待っています。

差出人不明だったから不安だったけれど、

行ってみることにした。

「埜原美希ちゃん？」

そこにいたのは、この間の

柏木先輩。

「先輩・・・どうしたんですか？」

何食わぬ顔で聞いてみる。

「俺な・・・ずっと美希ちゃんのこと好きやったん。
付き合ってくれへん??」

え・・・

「何で・・・」

「彼氏・・・優哉くんやつたか??
事故死してもうたやろ。」

ずっと、美希ちゃんのこと心配で
好きって言えへんかった。

優哉くんの変わりでもええから・・・
俺と付き合ってくれへん??」

・・・

それが、先輩との始まり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7306/>

キミ想イ。

2010年10月21日04時31分発行